

1970 年台湾回顧と親日感について

帝京大学理工学部助教授

藤原 勝彦

1970 年。私は日本の近・現代史を研究していた。この年の 6 月に私は神戸港より台湾の基隆港に向けて出発した。その時のことは今も記憶に鮮明である。それは私にとって初めての海外体験であるとともに、異文化理解の嚆矢となった。

同年、日本には国を挙げて取り組んでいた一大イベントがあった。人類の進歩と調和を統一テーマに掲げる EXPO 日本万国博覧会である。大阪千里の世紀の祭典は国民の期待を一心に集め、また戦後の復興の象徴としてかつてないほどのバスリグな状況が続いていた。

一方、このころ何かしらほかなる南の島（当時の印象として地理的・精神的にこの形容があたる）台湾に私は大きな関心を持ち、興味を抱き始めていた。それはおそらく、その年偶然目にした「植民地台湾」に関する記事に触れたことを近因とし、そして前々から日本近・現代史の中における台湾の持つ意味、特に 1895 年から 1945 年までの日本統治の歴史的意味を考察・検証してみたいということを遠因としていたように思える。更に述べるならば、東アジアの戦前戦後の歴史的展開を追うことによって、その底流を見極め、その中に流れる思惟性、心性を描いてみたいということだったと思う。

神戸から船で基隆へ

さて神戸港を出て 3 日後、船は基隆港に着いた。親戚の親友の方が台南に住んでいるということで、その家にお世話になるために北回帰線を更に南下してその日の内に目的地に着いた。

翌日からさっそく省立（現在は国立）成功大学に足を踏み入れることから活動は始まった。当時、同大学図書館の片隅の、あまり目に触れない位置に日本時代の資料は忘れ去られたごとく保管されていた。資料の収集整理、これが最初の私の仕事と思い作業を開始した。ところがこれがなかなか

はかどらない。もちろん気候や冷房施設の問題はあったが、特にコピー機が普及しておらず一字一字書き写す作業が続いたため、一頁写し終えるごとに手を休めなければならなかった。そして図表もかなり複雑なものが多かった。

はじめの数日間は本当に無味乾燥な作業が続いた。しかしそのような中で、時折台湾の一地方でしか見られないようなオリジナルな文献に触れた際には、驚き、感激しながら文献の一字一句に食い入るように見入った。

また同大学での作業の合間での人的交流、今では日常用語として定着した感のある「国際コミュニケーション」が台湾の学生との間で頻繁に行われた。今でも記憶に定かなことがある。それは中国語の発音のことであるが、「熱」re（拼音：声調でこのような発音表示をする）という発音ができなくて女子大生から何度も何度も指導を受けた。しかし私は「ズー」としか発音できなくて合格点はもらえなかったものの「ズァ」という音で何とかパスさせてもらった。

夜になると、みんな一緒に屋台に出かけては「国家」「人生」「青春」「夢」などの多岐にわたるテーマを寸暇を惜しんで語り合った。担担麵をすすりながら。

そのようなことをしているうちに約 1 カ月の時は過ぎた。その時点で結論らしきものに到達した。それは日本統治時代の台湾社会の変化の全体像をこの時点で把握することは容易ではないということだった。もっと包括的かつ帰納的な方法で問題を掘り下げていかなければならない。そのためには台湾での最大の政治・経済・文化の中心都市台北に調査研究作業を移すべきであると考え、台北に住居を移した。

台北ではまず台湾省文献委員会のトップの方に面会し、経過と事情を説明し色々アドバイスを受けた。その後私なりのストラテジー（戦略）を策定し更なる行動に出た。台湾大学図書館・省立図

書館での集中的な作業は予想以上に成果をあげた。中でも『台湾事情』（台湾総督府発行）は系統的で信頼性の高いものであった。所々に落丁を含んでいたが、その中に明示されている数値を辿っていくといろんなことが読み取れた。しかし、分析自体も意味は感じたが、この程度のデータなら日本でも手に入る。この数値分析に終始してはならない。今ここでしかできないことをやるべきであると考え始めた。

霧社での調査

そこで思い浮かんだことは、かの「霧社事件」のことだった。それは1930年10月27日午前8時頃、台中州霧社公学校で恒例の秋季合同大運動会の開会式が始まろうとした時、日本人皆殺しを図って、タイヤル族のグループが襲い、郡主を筆頭とした来賓、運動会参加の学童、観客などを含む日本人男女、子供など100余名が犠牲になった事件のことである。

私はこの事件は不明な点が多いと聞いていたので、その場に赴き聞き込みをし一次資料（いわゆるナマ資料）を今収集しておくことの意味は大きいと感じ、第三の訪問地台中霧社に作業の場を移すことにした。

季節は確か7月の後半だったと記憶する。初めて訪れる高山の風は実に爽やかで今でもその感触を忘れていない。さて現地に入ったが、私の想像していた霧社とは大いに異なっていた。来る前までのシミュレーションはまったく外れていたのである。事件後すでに40年の月日が経過し事件の跡はどこにもなく、何がしかのドキュメント（資料など）もほとんど残存していなかった。現地に声なき声、姿なき姿を追ってはみたものの成果が上がらず、約一週間の中で得たものは唯一警察日誌の写しのみだった（それは山地行政担当者としての警察官のナマ声として貴重なものと言える）。

それから数日後、事件関係者のインタビューをノート2冊に書きとどめ、山を降りた。約2週間に及ぶ台湾での貴重な体験、そこから得られた多くの資料と聞き込み情報、しかしそのこと以上に私自身の大きな収穫は、かつて植民地支配をした日本に好意的な有形無形の人情に触れたことであつた。一言で言うならば「親日」という言葉に集約できると思われる。もちろん個々の問題になると、

人によって濃淡の差が大きい。皇民化教育の母語の抑圧、教師の一部や同級生や警察に台湾人への差別があったことについて、苦々しい記憶を持っている人も多い。天皇について「戦場に仲間を狩り出した戦犯」として否定的にとらえる人々も少なくない。

心に残る台湾人の親日

しかしながら私の感じる台湾の人々の「親日」は本物であつた。台湾との出会いはその後の研究への幅と深みを与えてくれたことは言うに及ばないが、「親日」という2文字が私の心象に与えた影響は大きかった。しかし当時の時代的風潮からあまりこのことを強調することへの危惧から、私はあえて植民地問題へのエバリュエーション（評価）は避けた形で学びの一里塚をまとめた。

光陰矢のごとし。しかしながら心の一隅に「親日」という意味について WHY と HOW の問いは今も続いている。時代背景、国際状況が変わる中、西暦2000年台湾の2人の若い世代からの新しい植民地認識、思惟感に私は大きなインパクトを受けた。

一人は謝雅梅さん。彼女は『日本に恋した台湾人』（総合法令出版、2000年3月）の著者である。「植民地時代に日本国民として生きた父母の世代の日本好き現象と比較し、この現象は一過性のものではない」とし、「異なる時代背景の中で、長い歴史にわたり受け継がれたものだ」（総合法令出版の新刊内容紹介文より）と言明している。

もう一人は台湾国民中学歴史教科書『認識台湾』（この本は台湾で話題沸騰した画期的教科書である）の日本語訳者である蔡易達氏である。『認識台湾』でリマークすべきは以下の4点である。第1は台湾の中学生が使用する国定教科書であること。第2は従来の中国史を中心とした歴史教育を全面的に見直した編集により、分かりやすく台湾通史を概説していること。第3は台湾独自の歴史観を明確に主張していること。第4は本稿との問題意識を共有している日本植民地統治時期を客観的かつ積極的に評価していることである。蔡氏は同書の訳本の「刊行にあたって」では、「日本が欧米化を果たしたと同様、台湾は日本からあまりにも大きな影響を受けながら近代文明を吸収したということであり、また台湾人は同様の歴史的歩みをしてきた韓国人よりも、そうした史実を冷静に直視し

ているに過ぎない」(p-viiより)と述べている。

時代が変われば物の見方、考え方が変わるとは思うが、次代を担う現地の若者からこのような論調で語られようとは夢にも思わなかった。

日本とアジアのあるべき親善関係の構築と模索のための1つとして、台湾における「親日」性の意味をもう一度考えてみることは極めて重要であると思われる。この2文字の意味を正しく位置付け、その中から「前事不忘、後事之師」の糧を相

互の立場から得ることの意義は大きい。一過性の流行ではなく、喧騒的なプロパガンダでもなく、ごく自然な関係の確立のために。

参考文献及び引用文献

台湾国民中学歴史教科書『台湾を知る』(雄山閣出版、2000年3月発行)。

『台湾入門』(日中出版、2001年4月発行)。

【新刊紹介】

少数言語をめぐる 10 の旅 フィールドワークの最前線から

大角 翠編著 三省堂 2003 年刊

世界全体の言語の数は約 6,800 といわれるが、その 96%(6,530)は話す人の限られた少数言語で、英語、フランス語といった大言語に^おし^{つぶ}潰されるように消滅しようとしている。森林伐採などによって生態系の破壊、生物多様性の減少が進み、自然と共生してきた先住民族がその場を追われるとともに、彼らが使用してきた言語も衰微するという生物多様性と言語多様性の相関関係がその背景にある。

本書はアフリカ、中央アメリカ、中国、インドネシア、ニューカレドニア、オーストラリアなどの少数言語を、気鋭から^{せき}碩学まで 10 人の言語学者がフィールドワークによってつづった記録である。

専門書の内容を備えながら、読みやすさに配慮された啓蒙書となっているのは、危機に瀕した言語について、できるだけ広い読者に理解を求めようとする著者たちの意図のあらわれであろう。

編者が担当するニューカレドニアでは、カナク人と呼ばれるメラネシア系の先住民は人口の 44%(約 90,000 人)を占めるにすぎないが、カナク語は 28 の多きを数える。そのうちの一つ、ティンリン語の話されるグランドテール島南西部の(La Foa)近くのトリビュ(部族)に入り、そこに住み込むことから調査は始まる。

言語学のようにある場所に一定期間滞在、または訪問して行なう調査では、よいインフォーマント(情報提供者)が得られるかどうか成否のカギを握る。それは自分で探すというよりも、他力本願によることが多いから、運不運に左右される。そのインフォーマントと編者がやりとりするくだりは興味深く、一つひとつがストーンと胸に落ちる。

言葉は生きものだと思ふ。

こんにちの少数言語が置かれている状況は、その国や地域の政治、経済、文化、教育などの政策と無関係ではあり得ない。ニューカレドニアにはフランスの植民地支配によって奪われたカナク人のアイデンティティの回復をうたった「ヌメア協定」(1998 年)がある。そこにはカナク語を教育や文化の言語として、学校のカリキュラムやメディアでの使用をふやすことが明記されている。このヌメア協定が、28 のカナク語のうち、2,000 人以上の話者を持つのは 6 言語だけになった現実を救ってくれるだろうか。

〈西岡義治〉